

組合や市民団体と宗教者が協力する点で、「宗教」の枠を越境する試み(超宗教性)である。また、「宗教者災害支援連絡会」や「宗教者災害救援ネットワーク」は、宗教者と宗教研究者が緊密に連携を取り合っている点で、「宗教研究」という営みに自明のものとされる研究の主体と客体という分割線を双方から「越境」する試みでもある。さらにこれらの「越境性」がすべて見られる点で、「支縁のまちネットワーク」の活動は注目し値するといえよう。支縁のまちネットワークの今後の展開は、「社会的行為主体としての研究者というポジショナリティ」(櫻井義秀)という点でも、「宗教者と研究者の密接なコラボレーションによるアクションリサーチ型の調査研究」(白波瀬達也)という点でも、これからの「宗教研究」や「宗教者」のあり方に一石を投じるものとなるかもしれない。

アメリカ黒人のオリシャ崇拝運動にみる

縁の形成とジェンダー

小池 郁子

本発表の目的は、アフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)の社会運動の一つである、オリシャ崇拝運動において編み出される縁——人と人とのつながり——と、そこでのジェンダーにまつわる事象をとりあげ、運動とジェンダーとが交錯する領域について考察することである。具体的には、オリシャと呼ばれる西アフリカ、ヨルバの神々を崇拝する宗教・文化実践を核にし

たオリシャ崇拝運動が展開される社会空間に着目する。そのうえで、運動の社会空間が形成されるなかジェンダーはどのように規定されてきたのか、またジェンダーをめぐる問題が運動にどのような影響を与えてきたのかについて、運動形態の変化とともに検討する。

オリシャ崇拝運動は一九五〇年代後半にアメリカ合衆国で組織化された。この運動の当初の特徴として、ブラック・ナショナリズム(黒人分離主義)、伝統的価値観・生活様式の尊重、身体的な文化の実践、コミュニティ(生活実践共同体)の形成、脱都会志向などがあげられる。こうした特徴を踏まえて、本発表は、初期のオリシャ崇拝運動をブラック・ナショナリズムと伝統的価値観を軸に、人と人のつながりを形成する社会運動として注目する。それでは、ブラック・ナショナリズムや伝統的価値観をめぐっては、どのような議論がなされてきたのであるか。ブラック・ナショナリズムに関しては、それを実践する社会空間の暴力性、閉鎖性が強調されており、社会や政治とのコミュニケーションが欠如する傾向にあると論じられている[中条二〇〇二、本田二〇〇五]。また、伝統的価値観については、性別分業などの伝統的価値観によってコミュニティが束縛されていると指摘されている[Clark 1997; Curry 1997]。あるいは、コミュニティ形成の際に、アフリカの伝統的価値観を強調しすぎると、家父長制を支える性規範、性役割が再強化されかねないとの議論もある[Garloy 2000]。

そこで、本発表は、ブラック・ナショナリズムのなかでも、とりわけ伝統的価値観を重視するオリシャ崇拝運動の変容過程

をジェンダーとの関わりから明らかにし、運動の社会的、文化的変容能力の可能性について考察する。あわせて、アメリカ黒人の社会運動において、女性成員は米国社会と男性成員から二重に抑圧された被害者として論じられることが多いが[Hooks 1992、萩原一九九七、風呂本二〇〇三、フックス二〇一〇]、本発表ではこの点についても言及する。

以上を踏まえて、本発表は次のことを明らかにする。すなわち、オリシヤ崇拜運動には、運動形態が変化したとはいえ、伝統的価値観を現在も重んじているゆえに、集合的崇拜拠点(オトウンジ村)にせよ、個別崇拜組織(ハウス)にせよ、運動結成当初からの家父長的、男性優位主義的な実践がみられる領域もある。さらに、ハウスにおける男性結社や女性結社の活動などでは、自由労働イデオロギー[兼子二〇〇八参考]にもとづいた「男らしさ」を養成することもあり、家父長的、男性優位主義的な価値観を助長してしまうことも否めない。ただし、オリシヤ崇拜運動を実践する女性成員は、従属的、被保護的立場に終始し、運動によって抑圧されているだけではない。女性成員は、ときには米国という国家の枠組みを超えたヨルバランドのオリシヤ崇拜者や、民族の枠組みを超えた崇拜者とのつながりを築くことで、オリシヤ崇拜のジェンダー規範を変容させている。このことは、結果として、オリシヤ崇拜という実践を軸に女性の地位を向上させるとともに、限定的ではあるが、男性のみが社会的、経済的な責任を負うべきであるという家父長的な価値観から男女双方の成員を解放する可能性をもたらすといえよう。

東西霊性交流におけるヨーロッパ側の

受け止め方——その一例——

峯岸 正典

本発表は第二回東西霊性交流の記録から、来日した一七人の修道士、修道女の論考を中心に、なぜ彼らが日本の修行道場で禅の実践、実修をしようとするのか、その要因を考究し、この交流の持っている基本的性格と特徴について報告しようとするものである。資料としては『カトリック修道士の禅堂体験——「第二回東西霊性交流」報告——』(発行人・平田精耕、一九八四、五)を用いた。この交流においては①参加者が欧州側からの最初の来日グループであり、日本側も受け入れに力が入っていたということ。②初めて来日した人たちが多く、事前の予備知識がそれ以降の人たちより少ないということ。③「東西霊性交流」自体を中心となつて進める修道士たちが参加していたことなどが特記される。カトリック内部で提示された参加条件は、①修道院で生活していること。②東西の霊性に関心を持っていること。③日本での坐禅、摂心に耐えることができるような程度坐禅の経験があることであつた。参加者十七名のうち二名のみが女性で、平均年齢は五十一歳、司祭が全体の七六%を占め、大半がベネディクト会士であつた。修道年数の平均は二十九年で、修道院で指導的立場にある人が五二%。坐禅の経験に関しては、平均八年ということであつた。

彼らが来日前に抱いていた「禅」は坐禅、ゆつくりした動